

# 蘇る思い出の家具

老舗の家具販売店だった「立花家具」(尼崎市三反田町)が4年前に家具のリフォームに転業し、壊れても手放せない思い出の詰まった一品の「再生」に二役買っている。阪神大震災で傷付いたダンスや母親の形見の鏡台など、所有者にとって掛け替えのないものが多いといい、社長の松本邦男さん(68)は「壊れた家具をどうしようか、と悩んでいた人が喜んでくれると、何よりうれしい」と話している。

## 尼崎の 老舗販売店 リフォームに転業

同店は1968年10月、家具販売店として創業。74年頃には、婚礼家具の売り上げが全体の半分近くを占めたが、収納スペースを室内に備えたマンションが増えたことや、生活様式が変化することから売り上げが急速に減り、2004年、家具販売から撤退した。取引先の家具メーカーの職人らと再生の道を模索する中、05年3月に家具の修理を始めた。チラシを配るとすぐに、「地震で壊れたが愛着がある。補修できないか」「両親の形見が汚れている。きれいにしてほしい

## 震災で傷/形見の品

い」など依頼が相次いだ。注文は電話で受け、出張して見積もりする。ベテランの職人6人が、手作業で修復する。かんながけして傷を取り、イタチの毛で練り返し塗料を塗って磨き、木目を再現する。「買い替えた方が安い」と説明しても、修理を依頼する人もいるという。

西宮市の大村キク子さん(67)は、震災で倒れた食器棚の扉を固定する金具が壊れた。22年前、現在の家に引っ越してきた時に「新しい生活にふさわしい家具を」と選んだ品だった。38

## 「唯一無二」手作業で修復



テーブルを丁寧に修理する職人と、仕上がりを確かめる松本さん(右、尼崎市戸ノ内町で)

年間続けたトラック運転手の仕事を65歳で辞め、時間にとりかできたことから、10年来の念願をかなえ、扉が開くように修理を頼んだ。「家具は使うほど愛着が生まれる。あきらめかけていたから、本當にうれしい」

宝塚市の主婦小坂雅子さん(60)は2年前、96歳で亡くなった母の形見の鏡台を補修した。母が70年間、大切に使用していた嫁入り道具だった。「これからも使用する家具は少なくないはず。これからも、困っている人の力になりたい」と話す。問い合わせは同店リフォーム部(06・6429・2370)。